

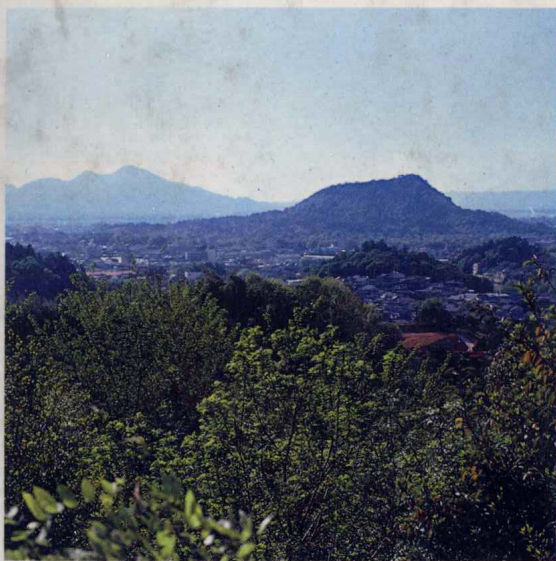
万葉の歌

1

人と風土

中西進企画

清原和義著



明日香・橿原

保育社

人と風土

中西進企画

武庫川女子大学教授 清原和義著

万葉の歌

1

明日香・橿原

保育社

万葉の歌一人と風土 ① 明日香・橿原

昭和60年11月25日 印刷 定価 1,400円

昭和60年11月30日 発行

著 者 清 原 和 義

発 行 者 今 井 龍 雄

発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚1-1-2

印刷 / セブン印刷株式会社

用紙 / 日本加工製紙株式会社

王子製紙株式会社

© 1985 清原和義

落丁本・乱丁本はお取り
替えいたします

ISBN4-586-70001-7 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN (NDC 910.8)

二つの古都——序に代えて

西安の街はどこかちがつていた。人人人で溢れる上海の活気も、揚子江を上り下りする船の汽笛が間断なく聞こえる坂の街重慶も、それぞれに忘れられない景ではあるが、西安にはそれらと異なる何かがあつた。

古の唐の都長安へ遙々とたどり着いたという心の昂揚と、かつて山上憶良が少なくとも一年余り生活した地を今訪ねているという興奮が、いつのまにかわたくしをこの街のとりこにしていた。

それゆえ、兵馬俑、西安碑林、大雁塔と見るものすべてに心をうばわれた。ただ、わたくしには一つ一つの名所が広い西安の中の点であつて、それぞれの点を結ぶ時代と風土の背景がよくわからない。それが残念であつた。

ガイドといえ、旅行社作製の案内書、現代の中国語で書かれたパンフレット、あ

まり流暢でない日本語による案内のみで、かすかな不満を解消してくれるものは何もない。ただ、西安は何かしら良かった、満足したの思いを抱くばかりであった。

初めて飛鳥古京を訪ねる人も同じ思いではなからうか。古代史の舞台、万葉のふるさとを訪ねている心のはやりを誰しも抱くことであろう。しかし、おそらくは心おどりは持つものの、わずか一日二日の間に見るものといえば、石舞台、飛鳥寺、高松塚など、いわゆる飛鳥名所の類であって、それらを広い面の中の有機的なつながりを持つ点としては、なかなかとらえがたいことと思う。

本書はそのような飛鳥の旅人が、点から面へと万葉故地を理解して行く、よきガイド（指針）でありたいと願う。旅立つ前に、旅の道中に、旅の後に、くり返し読み直していただくことによって、飛鳥・橿原の地に脈々と宿っている万葉の歌ごころをより深く理解していただこうと願っている。

歌の解釈には、現代の万葉学の成果をとり入れるように努めた。写真と地図も豊富に入れた。文章も改行を多くして、読み易さを心がけた。この新しいガイドを手に、一人でも多くの人が、飛鳥・橿原の地を訪ねてくださることを願ってやまない。

いざ飛鳥へ、いざ万葉のふるさとへ。

采女うねめの

袖そで吹きかへす

明日香風あすかかぜ

京みやこを遠み

いたづらに吹く

志貴皇子しきのみこ
(卷一―五二)



あまかしのおか 甘樫丘より 畝傍山・二上山(後方)を望む



明日香川 あすかがは

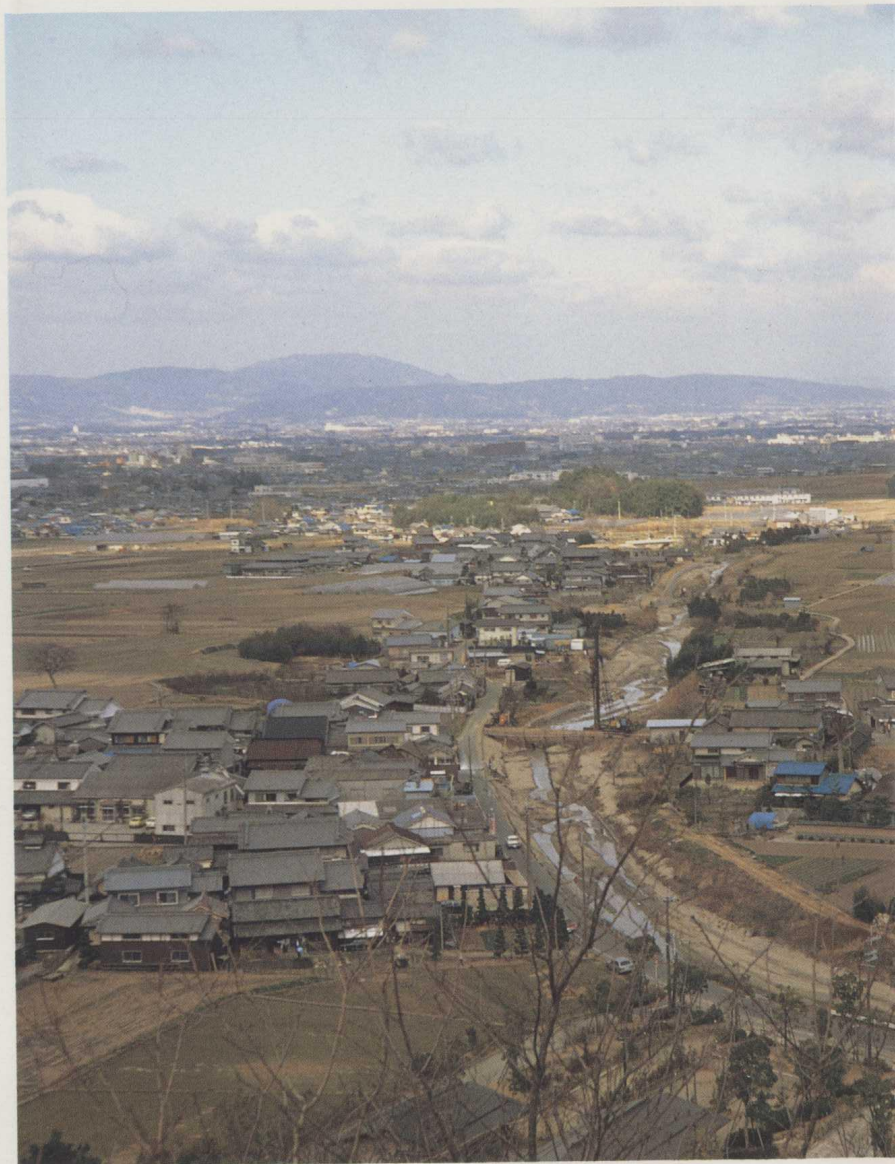
川淀去らず かはよど

立つ霧の

思ひ過ぐべき

恋にあらなくに

山部赤人（卷三十三五）



あまかしのおか
甘樫丘より見る飛鳥川(右前方の小山は耳成山)
みみなし



明日香村大字飛鳥より見る天の香具山

いじへ
古の

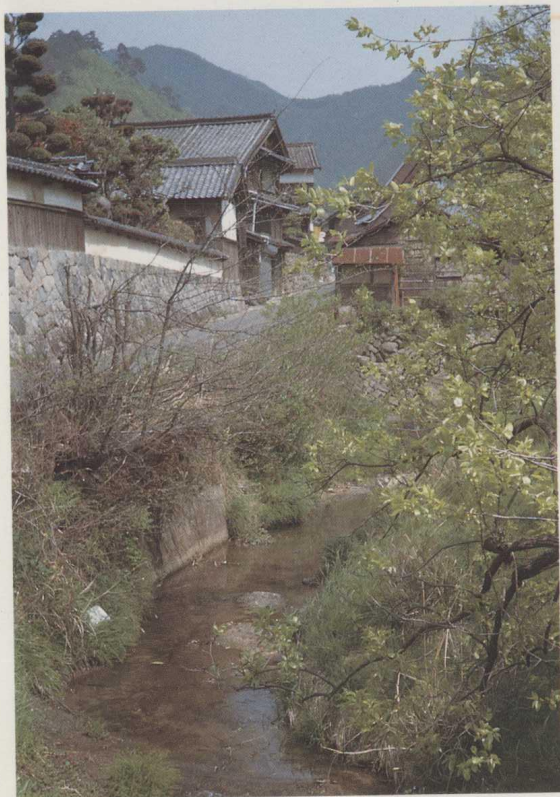
事は知らぬを

われ
我見ても

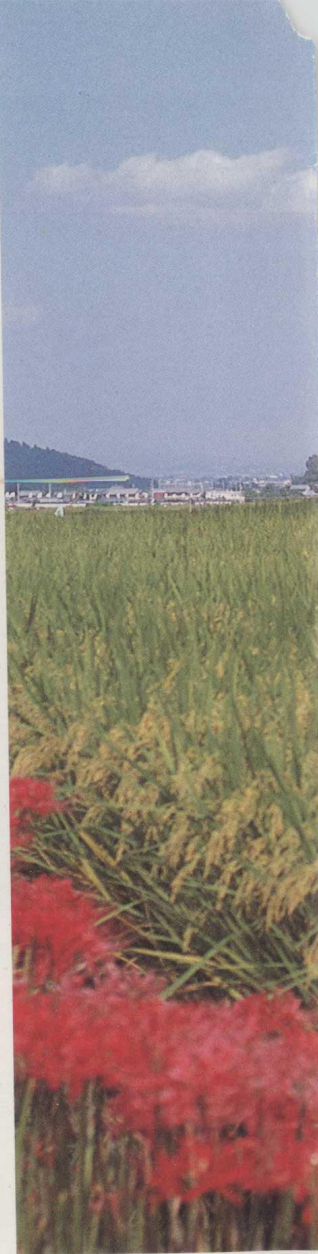
久しくなりぬ

あめ
天の香具山
かぐやま

(巻七一〇九六)



飛鳥川源流(栢ノ森付近)





飛鳥川にかかる^{かんじよ}勧請綱(栢ノ森付近)

あすかは
明日香川

あす
明日も渡らむ

いはよし
石橋の

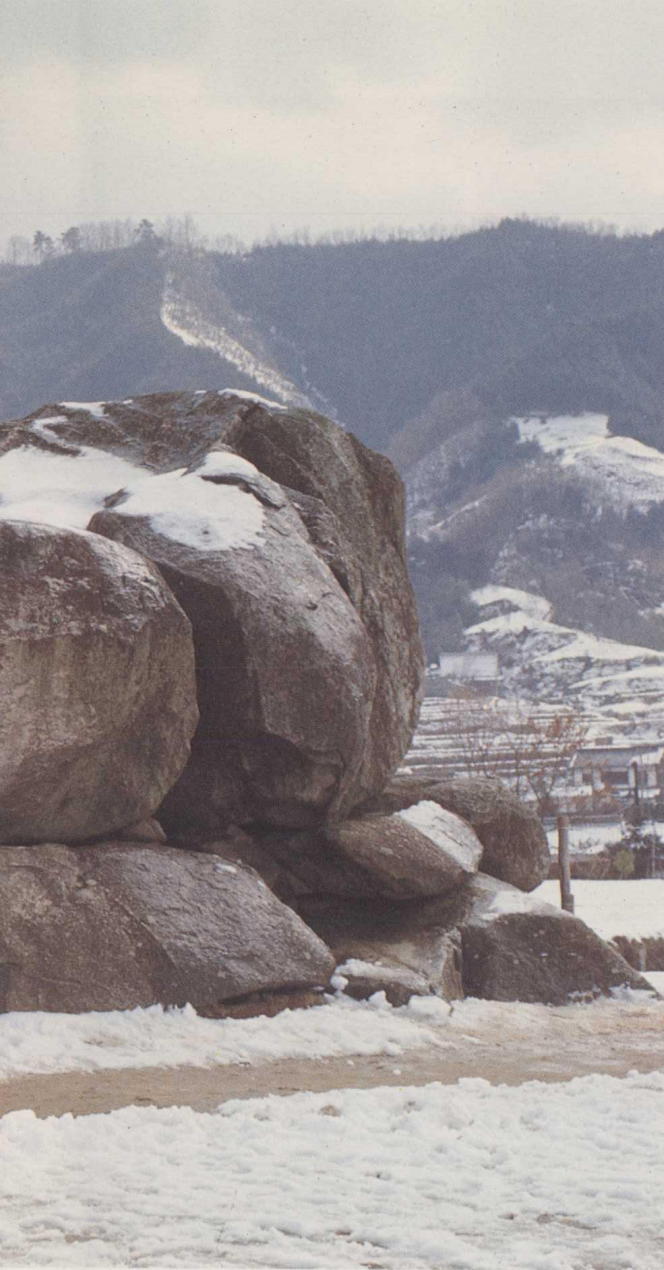
遠き心は

思ほえぬかも

(卷十一一二七〇二)



飛鳥川の石橋(飛石)，稲渚付近



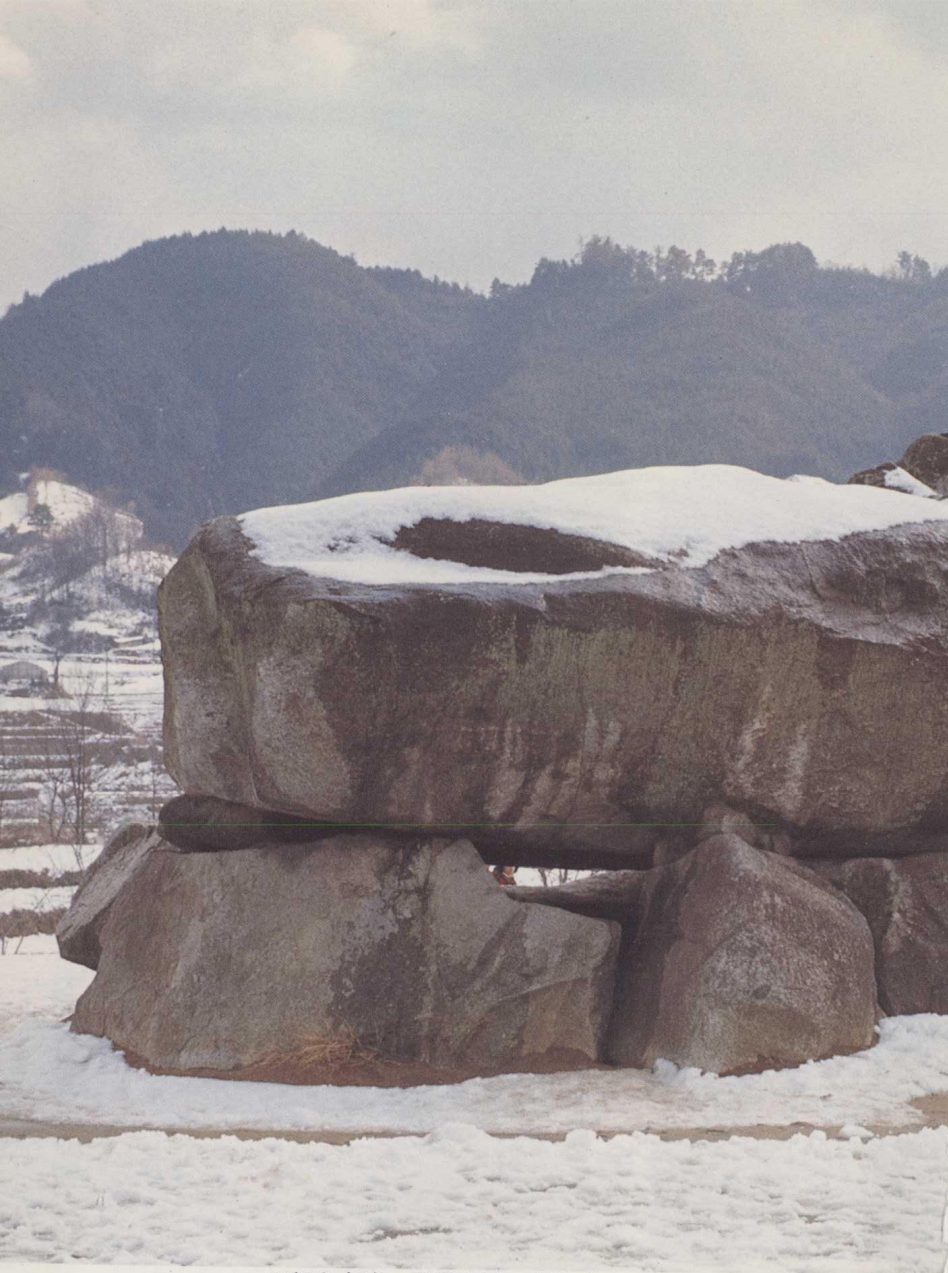
御食向^{みけ}かふ

南淵山^{みなぶちやま}の

巖^{いはは}には

降りしはだれか 消え残りたる

柿本人麻呂歌集（卷九一七〇九）



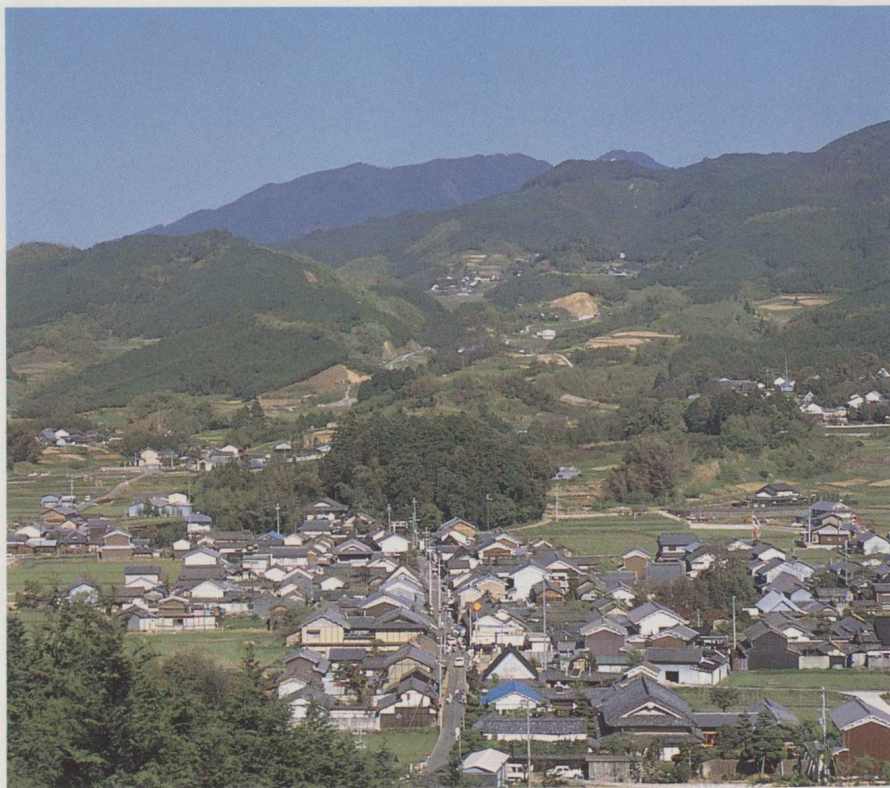
石舞台古墳，背景は雪の南湊山



上：飛鳥寺(安居院)，下：川原寺(弘福寺)

飛ぶ鳥の
あすか
明日香の里を
置きて去^いなば
君があたりは
見えずかもあらむ

(巻一七八)



明日香村飛鳥(中央)と八釣(左上), 小原(右上)



三諸みもろの 神奈備山かんなびやまゆ

との曇ぐもり 雨は降り来きぬ

天霧あまぎらひ 風さへ吹きぬ

大口おほくちの 真神まかみの原はらゆ

思ひつつ 歸りにし人

家に至りきや

(卷十三―三六八)